



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	太閤記物の研究 : 権力と文学の関わりに注目して [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	竹内, 洪介
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15053号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85406
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kosuke_Takeuchi_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 竹 内 洪 介

主査 教授 富 田 康 之
審査委員 副査 教授 後 藤 康 文
副査 准教授 鈴 木 幸 人

学位論文題名

太閤記物の研究 ―権力と文学の関わりに注目して―

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文の「権力」と「文学」との関わりというテーマは特に目新しいというものではないが、「太閤記物」を対象として豊臣・徳川という二つに跨る権力の問題を設定したことに特徴がある。また、研究の基本には極めて膨大な諸本調査が行われており、この過程で貴重な資料を見出す成果を着実に挙げていることも特筆すべき点である。

第一部では、後陽成天皇による二度の聚楽第行幸に関する記録である『聚楽行幸記』、および『天正二十年 聚楽第行幸記』を取り上げる。天正 16 年（1588）の聚楽第行幸を記録した『聚楽行幸記』は、関白豊臣秀吉の権力を誇示し、政治的・文化的に重要な意義を持つ行事であったことは周知のとおりであるが、続く豊臣秀次主宰の聚楽第行幸を記録した『天正二十年 聚楽第行幸記』について、武家関白としての秀次の性格を喧伝する目的を指摘し、その上で関白に軍事的要素を付与し、秀吉から秀次への関白相伝を正当化するためのものであったことを明らかにしている。更に具体的な成果を示せば、第一章『『聚楽行幸記』諸本考』では、これまで『聚楽行幸記』は 16 本の諸本が知られていたが、新たに調査を進め全 43 本を対象として考察した。その際、あまり古典籍の書誌学的調査には重要視されてこなかった料紙の質にも着目し、装訂も含めて検討することで、送付本系統および豊臣秀吉手控本系統に大別され、「大阪城天守閣本」と「尊経閣原本」が各系統の原本であることを明らかにした。従来、便宜的に『群書類従』所収本によって検討することが常であったが、その見解を改めた上で諸本全体の分類を行い、その結果『聚楽行幸記』諸本研究の基礎を確立したと言える。

また、第二章「天正二〇年聚楽行幸考」では、これまで第二回聚楽行幸のまとまった記録は知られていなかったが、初めて『天正二十年 聚楽第行幸記』（個人蔵）を見出すに至ったものである。また、付録としての本書の全文の翻刻・解題も貴重である。

第二部は、近世後期の代表的な太閤記物を取り扱うもので、四章から成る。第二部全体では、近世後期の太閤記物が、秀吉個人に焦点化していくという変容の様相を明らかにするものである。具体的な成果を示せば、第一章『『太閤真蹟記』異本系統考』では、12 編 360 巻の大部から成る『太閤真蹟記』諸本について「異本系統」と「流布本系統」との二系統に分かれることを明らかにし、その上で異本系統における物語の構想上の齟齬を解消しつつ秀吉の功を強調した物語へと改変されていることを論証した。

第二章「太閤記物実録三種考」では、『真書太閤記』『太閤真蹟記』『重修真書太閤記』三書の本文が殆ど同一化しているような状況であったが、分析の結果、三書が弁別可能であるとし、『真書太閤記』が『重修真書太閤記』に先行する別の書物であり、『真書太閤記』の成立が『太閤真蹟記』に先行することを明らかにした。また、『太閤真蹟記』は『真書太閤記』の内容を、秀吉への焦点化をより図ったものと指摘した。

第三章「屏風になった『絵本太閤記』」では「絵本太閤記屏風」を取り上げる。これは『絵本太閤記』の挿絵を利用して屏風装に仕立てたものであり、『絵本太閤記』本文と選ばれた挿絵との分析から、この屏風が秀吉の「智」をテーマとして仕立てられていることを明らかにした。本章は

屏風絵と文学とを融合させた分析方法を示したという点も含めて評価できるものである。

第四章「幕末の出版検閲と『絵本太閤記』の再版」では、『大坂本屋仲間記録』の記事を詳細に検討し、『絵本太閤記』が再版されるまでに約二年を費やした交渉があったことを明らかにした。また、『絵本太閤記』再版での仮名から実名への変更が幕府側の命によりなされたことを指摘し、昌平坂学問所の学者たちが当時の秀吉の英雄史観を許容したことがその要因の一つであることを検証した。

・学位授与に関する委員会の所見

本審査委員会は本論文の何れもが極めて高い水準にあると判断した。その主たる要因は、資料調査の範囲の広さと数々の発掘資料の質の高さにある。その上で新しい見解を着実に展開している点が良好な評価に繋がっている。但し、近世中期に関する考察が手薄になっており、この部分の不十分さは否定できない。しかし、このような問題点は本人も明確に自覚しており、今後継続して研究を進めることで十分に解消されるべき質のものである。よって上述の研究成果を些かも損なうものではない。本審査委員会は、以上のような審査結果により、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいと結論した。